
ヒバードの並盛町巡り～ひとりぼっちの運命～

曇坂陽向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒバードの並盛町巡り〜ひとりぼっちの運命〜

【Nコード】

N9044I

【作者名】

曇坂陽向

【あらすじ】

並盛町を探検するヒバードが見つけた、『友だち』とは…？※タイトル一部雲雀のキャラソンより

(前書き)

すべてヒバード視点です。

「ミードーリタナービクラーナーミーモーリーノー♪」

今日の僕はすごくご機嫌だ。

さっき雲雀さんがごはんを分けてくれたからね。

その後雲雀さんはいつものように屋上に上っていったから、僕もついてきたんだ。

屋上は日当たりがよくて、すごく暖かった。

「ふぁあゝ…」

ほら、雲雀さんが大きく口を開けて欠伸してる。

……あ…、寝ちゃった。…つまんないな。

今日は天気もいいし、色んな場所を探検してみるか。

「パタパタパタパタ…」

僕は大空に飛び立った。

最近をよく色んな所を飛び回るんだ。

昔、バーズの鳥だったころは時々命令されて飛んでたけど、自由に飛ぶのが一番楽しいよ。

そう思うと、僕は雲雀さんについてきて良かったと思う。

初めて出会った時に並盛中学校校歌っていう歌を教えてもらって、今ではすごく気に入ってよく歌うんだ。

それにバーズより雲雀さんのほうが、ずっと強くてカッコいいよ。
この前ディーノさんが来た時に聞いたんだけど、雲雀さんはボンゴレファミリーの雲の守護者なんだ！

…あ、雲雀さんの自慢ばかりしちゃったね。

「パタパタ…」

あ！校門の前に誰がいる！
ちよっとだけ近づいてみよう。

あれは…

「パタパタパタ…」

「わっ！」

「はひっ？」

時々ごはんをくれる京子ちゃんとハルちゃんだ。

「雲雀さんの鳥さんだよ！」

「キョウコ！ハル！」

「名前覚えてくれたんだね。」

「すごく賢いです！雲雀さんがしつけしているんでしょうか…」

「そうじゃないかな。雲雀さんの鳥さんだもん。」

「あのデンジャラスな雲雀さんが…。想像つきませんね…。」

「デンジャラス？」

「ええ！…あ、でも動物になつかる人は優しい人だっていいですよね…」

「じゃあ雲雀さんは優しい人なんだ。」

「そう…なんですかねえ…？」

京子ちゃんもハルちゃんも雲雀さんが優しい人だって知ってるんだね。

京子ちゃんとハルちゃんは雲雀さんの友だちなのかな？

京子ちゃんとハルちゃんはちょうど曲がり角を曲がろうとした。

僕もそろそろ違う場所へ行こうかな。

そう思い立って、僕は京子ちゃんの手から離れた。

「パタパタ…」

「あ！鳥さん！」

「行っちゃいましたね…。」

僕はまた急上昇して、旋回を続けた。

そして今度は公園の方にやって来たんだ。

そこでまた1つ、小さな人影を見つけた。ベンチに座っているみたいだ。

「パタパタパタ…」

「！」

女の子だ。変わった髪型をしていて、格好も何だか変わっている。

「鳥…？」

女の子はちょっと驚いているみたいだ。

「パタパタ…」

僕は女の子の手に乗せてもらった。

「…：雲の人の…鳥？」

女の子は小さな声だったけど、僕にはちゃんと聞こえたよ。

この子はもしかして雲雀さんと同じ守護者の人なのかな。

「コンニチハ！」

「っ！…は…話せるの？」

「ナマエ！ナマエ！」

「な…名前…？私…？…私はクローム髑髏っていうの。」

そのクローム髑髏という変わった名前の女の子は、優しく笑った。

「クローム、ドクロ！」

「わ…：…すごく…賢いんだね。ありがとう。」

…見つめられて僕はちよつと照れちゃったんだ。
名残惜しいけど、そろそろ別の所に行こうかな。

「パタパタパタパタ…」

「バイバイ…」

バイバイ！

僕はちよつといい気分になって、飛び立った。

「パタパタ…」

また誰かいないかな。

今度は学校の方に戻ってみよう。

僕は少しだけ速度を速めた。

…あ！昇降口に誰がいる。今度は…男の子かな。

あれ？何か言い争ってる…？

「てめー何でさっきからここに立ってやがんだ！野球バカ！」

「お前だってなんでここにいるんだよ、獄寺。」

…あれは確か雲雀さんと同じ守護者の獄寺君と山本君だ。

「パタパタパタ…」

「あ？」

獄寺君はどうやらご機嫌斜めみたいで、睨まれてしまった。

僕は怖かったから、山本君の肩に乗っけてもらったんだ。

「お！雲雀の鳥じゃん。…いつ見ても小せえな。」

山本君はニコツと笑ってくれた。

「ヤマモト！」

「わ！すげー！お前やっぱ賢いな。」

僕は賢いって言われるとすごく嬉しくなるんだ。

「ゴクデラ！」

『獄寺』の発音はすごく難しいんだけど、僕は頑張って名前を言った。

「フン……」

でも獄寺君はそっぽを向いている。

「俺今食い物持ってねえんだ。悪イな、雲雀の鳥。」

ありがとう山本君。ちゃんとお昼ご飯は食べたから大丈夫だよ。

「じゃ：じゃあ俺のパンやるよ。今日買いすぎて：食えなかったのがあるからな：。」

獄寺君は恥ずかしそうに僕にパンのかけらをくれた。

僕はすごく嬉しくなったんだ。

獄寺君も優しい人なんだなって思ったよ。

「お前動物には優しいよな。」

「ばっバカ言ってるじゃねえ！パンがもったいないからだ！」

獄寺君はまたプイツとそっぽを向いてしまった。

「あはは！素直になりやいいのに！」

山本君はいつでも笑顔だ。

僕は山本君の笑った顔がすごく好きなんだよ。

「黙れ野球バカ！つか早く帰れ！」

獄寺君は大声で怒っている。

「俺はツナ待ってるの。どーせお前も一緒だろ？」

「はあ！？何で野球バカを入れて帰らなきゃなんねえんだよ！」

「まあまあ、2人より3人の方が楽しいって！」

僕は2人は仲良しなんだなって思った。喧嘩するのは仲良しの証拠なんだよね？

そして僕は獄寺君にもらったパンを食べ終えて、また飛び立った。

「お、じゃあな。」

「……」

パンありがとう！2人とも仲良くね！

「パタパタ…」

僕はグラウンドに出た。すると校舎に繋がる階段に人影が見えた。

「パタパタ…」

あれは男の子だ。階段に座っている。
その隣に：ボクシングのグローブが置いてある。

「お。」

男の子はちよつと驚くそぶりを見せた。

「リョウヘイ！リョウヘイ！」

僕は顔を見て、直ぐに了平君だと気が付いた。

「おう、雲雀の鳥ではないか！」

了平君は腕に僕をとまらせてくれた。

「いいところに来たな。今ちょうど部活の休憩時間だな。

パンを食っていた所だ。お前も食え。」

ホントに！？今日はツイてるな。またパンをひとかけら貰っちゃった。

「お、もうこんな時間か。じゃあな。俺は極限練習だ！」
じゃあね！

パン、獄寺君のと同じくらいおいしかったよ。ありがとう。

「パタパタパタ…」

僕はすごくご機嫌になって、低飛行していた。すると、校舎のすぐ脇に植木が並んでいる。

するといきなり植木から、すごく大きい何かが飛び出して来た。

な！？何だ！？

……でも、そう思ってももう遅かった。

「ニャー！ー！！」

わあああああああ！！！！！！

……僕は、そのまま気を失ってしまったんだ。

う…体が…痛い…。

僕が目覚めたのは、ふわふわした布の上。

「あ…リボン！雲雀さんの鳥！目を覚ましたよ！」

「そうか。ならもう安心だ。…まあ俺の治療は完璧だからな。」

「ありがと、リボン。」

何やら話し声が聞こえる…。何だか聞いた事のある声だ。そしてここは…保健室？

「大丈夫かな？」

あ…ツナ君だ。…大丈夫？って…僕は……

そうだ…思い出した！僕…猫に襲われて…そのまま引つかかれて気絶しちゃったんだ…。

僕は自分の胴体に包帯が巻きついていてのに気が付いた。

「もう飛んでも大丈夫だ。羽を引つかかれないで、運が良かったな。」

ツナ君とリボンさんが手当てしてくれたんだね。

本当にありがとう。

「はあ…良かった。じゃあそろそろ帰るか。」

そうだ！獄寺君と山本君が待ってるよ！僕のせいで遅れちゃったかな…

「ああ。帰ったらまた修行だぞ。」

「ええ！？」

「お前、みんなを守るんじゃないのか？」

「う…うん…そのためなら何にだって耐えるよ…。

…俺はみんなに傷ついてほしくない。

守護者のみんなも、俺の仲間とか…とにかく誰だって。」

「…容赦しねえぞ。」

「う…。や…やるさ！俺はみんなを守るための強さが欲しいんだから。」

「良い答えだ。帰るぞ。」

守護者の…みんな…。

じゃあ雲雀さんも入ってるんだよね。

ツナ君は雲雀さんのこと、すごく大切な仲間だと思ってるんだ。

「うん。その前に雲雀さんの鳥を逃がしてあげなきゃな。」

ツナ君は優しく僕を手のひらに乗せて、窓まで運んでくれた。

「パタパタ…」

ちょっと体は痛かったけど、ちゃんと飛ぶことができた。

ありがとう！ツナ君。リボンさん。

さようなら！

ツナ君は僕に向かってニッコリ微笑んで送ってくれた。

そろそろ雲雀さんの所へ戻ろうかな。

「パタパタパタ…」

僕はゆっくり上昇した。

そして、やっこの思いで屋上に着いた。

「！」

あ！雲雀さんだ。さっき起きたのかな。

「やあ。」

「パタパタ…」

僕は雲雀さんの手に乗っけてもらった。

「？怪我…したの？」

「ケガ！ケガ！」

「ふうん。…包帯…してあるね。誰かにしてもらったんだ。」
雲雀さんは笑った。

いつもと同じ、優しい笑顔だなあと思った。
僕はとても幸せな気分になったよ。

すると急に屋上の扉が開いた。

「あ…：…ひばり…さん…？」

あれは…ツナ君だ！

ツナ君はキョトンとしている。

「雲雀さん…ですよね？」

「…僕以外に誰がいるっていうの？」

雲雀さんの表情はいつものもの変わった。

「！あ、いや、その…なんか…表情が…いつもと違って…」

ツナ君はさっきまでボーっとしていたのが、急にそわそわし始めた。

「…？それより…何しに来たの。」

「え！あ、ああ…俺…財布落としちゃったみたいで…。」

あの…今日屋上でごはん食べたの思い出して…それで屋上に来たん
です。

…あ、いやっあの…邪魔なら帰りますから！」

「別に：群れてないみたいだから良いけど。それより：探し物はこれかい？」

雲雀さんは足元にあった青い財布を拾った。

どうやら雲雀さんは僕が来る前に拾っていたみたいだ。

「あ！すっすいません！それです！

あの：ありがとうございます：。」

雲雀さんはツナ君に財布を渡した。

「あ：。」

！：その時、僕とツナ君の目が合った。

「あの：：：その鳥：そんなに深い傷じゃないから：3日もすれば治るそうなので。」

「：：この包帯：君がやったの？」

「は：はい。俺とリボンが：。」

あっ：あの！ケガ：してたから：なんですけど。」

ツナ君はたじろいでいる。

「ふうん。：そう。貸しを作っちゃったね。」

すると雲雀さんはまた急に優しく笑った。

ツナ君はちよつとびっくりしているみたいだ。

：実をいうと僕もちよつと驚いたんだ。だって雲雀さんはあんまり人に笑顔を見せないから。

「あ：別に貸しとかは：いいので！

…じゃあ失礼します！」

ツナ君は勢いよく扉をしめて、出て行ってしまった。

雲雀さんは屋上のフェンスにもたれかかって、外を眺めている。

「…あの男…やはり面白い…。飽きないね。」

雲雀さんは不敵に笑う。

「ウレシイ！ウレシイ！」

僕は雲雀さんに教えてあげたんだ。

雲雀さんは今嬉しいんだよって。

雲雀さんは自分の感情に気づくのが下手なんだ。それが最近分かってきた。

「嬉しい…？何が…」

だって雲雀さんはツナ君と話した時笑ったじゃないか。

「…」

雲雀さんはグラウンドをまた眺めた。

僕も一緒に眺めた。

…そこにはツナ君と獄寺君と山本君が3人で楽しそうに歩いていた

んだ。

「群れてる…」

雲雀さんは少し眉をひそめた。

「…僕は群れたりしないよ。だからいつだって1人で生きていく。

…僕は誰よりも強いからね。」

雲雀さんは…やっぱり自分の事に気づくのが下手なんだ。

僕は雲雀さんにたくさん友だちがいて、すごくうらやましかったんだよ。

だから…間違ってる。

…ただ、『1人』っていう所だけけど。

運命なんて、もうとっくに変わっているのに。

：群れないけど、

1人ではないんだ。

e
n
d.

(後書き)

最後までお読みいただきありがとうございます！
評価や感想など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9044i/>

ヒバードの並盛町巡り～ひとりぼっちの運命～

2010年10月11日16時04分発行